



真の理由



川崎ゆきお

「もう一つ深い階層とはどういうことでしょう」

「もう一つの思惑だろうねえ」

「表面的な理由の下にある考えのようなものですか」

「そうだね。だから同じ理由で行動しても、実際の狙いは違うこともある。また、満足度もね」

「たとえばどんな例がありますか」

「元気がそうだね」

「げ、元気ですか」

「元気だからやる。それだけの理由もある」

「元気だから何かをやるわけですね」

「うむ、何でもかまわない。元気を発揮出来るものならね」

「スポーツなんかがそうですか」

「さあ、それは元気の使い方も人それぞれでね。本当の狙いはスポーツではないのかもしれないしね」

「では、真の狙いがもう一つ下の階層にあるということですね」

「その階層の下にも、また階層がある。真の狙いとして見えているものもあれば、本人にも分からんこともある」

「深層心理のようなものですか」

「そこまで深くなくてもいいし、そんなものがあるのかどうかも、よく分からんよ。理由をそちらへ持って行きたいだけかもしれんしね」

「表向きの理由じゃなく、その下の階層の狙いまでは分かります。本音に近いですね」

「いや、まだそこは本音ではないし、そうであっても丸見えだろうねえ。それが分かった上でやっておる」

「じゃ、もう二階層ほど下ですね。ポイントは」

「まあ、そんな単純なことじゃないだろう。特に人が絡んでくる問題ではなね」

「何でしょう、それは」

「やっつけてやろうとか、つぶしてやろうとか、逆に恩をここで売っておこうとか」

「ああ、ありますねえ。普通に。それも丸見えですよ、師匠」

「わしが気にしているのはね」

「はい、何でしょう」

「つまらん理由だよ」

「はあ」

「いや、あまりにもくだらない。または些細なことが真の理由の場合だ。これは見えない。狙いがね。これが一番難解なんじゃなあ」

「たとえば」

「歯が痛いから気晴らしで、何かやったとかね」

「は」

「これは見えない。真の狙いがね」

「そうですねえ。しかし、そんなことが理由になるのでしょうか」

「そうなくても構わないと許すところの階層がある」

「はい。無茶をしてもいいという理由があるのですね」

「歯が痛い、気晴らしでとんでもないことをする奴ばかりではないだろう」

「そうですよ」

「しかし意外と、そんな単純なことが動機になっていることが多い」

「深い意味なんて、何もないですよ」

「分かりやすくていいが、それだけじゃないだろうと普通は思うはずだ」

「はい」

「まあ、単純な解にしておいた方がいいのだがね」

「しかし、人間は複雑ですから」

「本音は単純じゃないのかな」

「それは」

「本音というより、本能に近いものかもしれん」

「たとえば、それは」

「まあ、生理的なものかもしれんねえ」

「師匠、それでは深い話にはなりません」

「そうか」

了